

2019年2月5日

武田知己

萩原 稔

概要

2018年11月23日（金）～11月25日（日）の3日間、参加学生5名を引率し、石川県金沢市・富山県南砺市を訪問した。今年度は、富山県南砺市出身の政治家・松村謙三（1883 - 1971）の顕彰事業への参加、及び事前学習の成果報告に加え、南砺市も含まれる「旧加賀藩」における郷土の偉人についての調査という側面も意識して、新たに同藩の中心都市であった金沢市における視察を加えた。教員の参加は、武田・萩原の2名である。

以下、実施内容について報告し、来年度以降に向けての課題も示していく。

11月23日（金）



初日は、旧加賀藩の中心都市である金沢市を訪問した。本事業の実行委員を務める谷本互氏と合流したのち、最初に視察したのは、明治・大正・昭和期において国際的に活躍した金沢市出身の仏教哲学者・鈴木大拙の記念館である。鈴木は英文で禅についての書物を刊行するなど、

西洋に仏教、とりわけ禅の思想を広く紹介し、大きな影響を与えた人物である。鈴木大拙館では書や写真、著作などの展示を通して鈴木の人物を「知る」、そしてその思想を「学ぶ」とともに、自ら「考える」ことをコンセプトとしており、参加した学生・教員も、「水鏡の庭」と題された庭園を眺めつつ、さまざまに思索をめぐらせていた。

続いて訪問したのは、金沢市ゆかりの近代の著名人を顕彰する金沢ふるさと偉人館である。先にあげた鈴木大拙のほか、化学者としてアドレナリンを発見した高峰譲吉、日本独自の哲学を構築した西田幾多郎、台湾のダム建設工事に尽力し現地の人々から尊敬を受けた八田與一、明治期の政治思想家として大きな影響を与えた三宅雪嶺など、さまざまな分野で国際的国家的業績をあげた人物を紹介している。同館学芸員の増山仁氏により、加賀藩から近代における偉人が輩出された背景についての説明を受け、輪島道友館長をはじめとする館員の方々による案内のもと、館内の展示を観覧した。施設を見学する小学生などに向け



て、個々の人物に関するエピソードなどを紹介するなどの工夫もなされており、さらに「金沢市内小学生のリクエストによる偉人たち」コーナーなども設けられている。観覧した学生にとっても、自分の専門分野とは異なる分野の偉人の業績についても理解を深めることができた。



引き続き同館の会議室において、谷本互氏による「幕末から明治維新での貢献・研究成果——加賀藩および雄藩と比較して」、および鳥取県での偉人の顕彰事業に携わる安藤隆一氏（総務省地域力創造アドバイザー）による「ふるさとの偉人をどう『まちづくり』に活かすか」という講演がおこなわれた。谷本氏は加賀藩と将軍家とのつながりから説き起こしつつ、幕末維新の激動に際しては状況に追随する形での対応に終始したこと、廃藩置県の経過、そして近代における著名人の輩出について、富山・石川・福井の北陸三県を比較して説明した。安藤氏は、松村謙三とともに日中国交回復に尽力した鳥取県出身の政治家・古井吉実についての研究をおこなっているが、今回の講演では地域の偉人を顕彰することを通じて、住民が自らの地域に対する「誇り」を持って生きるという意味があると同時に、偉人の本質を住民が理解



し、その生き方や思想を継承し、実践していくことが必要であると述べ、近年の鳥取における実践例を紹介した。参加した学生にとっては、翌日以降に控えた松村謙三の地元である南砺市における視察、および自分たちの研究発表がどのような意義を持つのかを、それぞれに考える手掛かりとなった講演であった。

その後は金沢市内を散策したのち、同市内に宿泊した。

11月24日（土）

午前中に金沢市を出発し、南砺市に到着した。松村謙三の地元・福光地区（旧福光町）にある松村記念会館にて、「松村謙三塾」の開講式が行われ、松村に関連する資料の展示を観覧したのち、記念会館と隣接する福光福祉会館において、郷土史家の辻澤功氏による「松村謙三先生を知る」と題された講演が行われた。松村家の祖先が「勸進帳」に出てくる富樫氏の子孫であるという説、また越前の戦国大名・朝倉氏との関係などから、松村家が福光へと居を移していった経緯、そして松村謙三自身の業績などについて、長年にわたる松村の研究の成果をふまえた丁寧な解説がなされた。



続いて、松村謙三の生家（松村謙三故居）を訪問した。謙三の孫にあたる松村寿氏により、生家の由来などについて説明していただき、また松村家に所蔵されていた、明治時代の地租改正において土地所有を証明するために発行された地券を特別に見せていただいた。学生も高校の日本史などで地券についての知識を学んではいたものの、現物を見るのは初めてであったため、その記載内容について丹念に読むもの、地券の色の違いなどが発行時期に由来するのかなどを確かめ合うものなど、それぞれに非常に興味を持った様子であった。

昼食後、松村謙三の故郷の史跡を訪ねる、という趣旨のもと、砺波平野に多くみられる伝統的家屋「あずまだち」を見学し、さらにこの地域の特徴をなす散居村の風景を一望できる展望台を訪問した。その後、翌日の研究成果発表に備え、関係者にヒアリングをしたり、図書館等で最終的なチェックを行ったりするなど、それぞれに準備を進めた。

夕方には、南砺市出身の富山県議会議員・南砺市議会議員3名との懇談に臨んだ。現在の政治に対する考え、県議会議員による中国訪問のエピソード、そして地元の偉人である松村謙三に対する思いなどをざっくばらんに話していただいたこともあ

り、学生からも「若者向けの政策」や「現在の日中関係」などに関する真摯な質問が飛び出し、時間が足りなく感じるほどに充実した懇談となった。

11月25日（日）

最終日の午前中には、学生の研究発表会が開催された。それぞれのテーマに基づいた研究報告は、ご来場の地域住民の皆様を相手に20分、質疑応答も活発に行われた。



川上佳小吏さん（政治学科3年）が優秀賞を、箕輪雅之君（同上）が特別賞を受賞した。

午後には、真辺将之早稲田大学教授のご講演、その後、「松村謙三から何を学ぶのか」とだいて、武田をコーディネーターにパネリスト谷本互（松村謙三先生を伝えよう事業実行委員会委員）、太田浩史（日本民芸協会常任理事・となみ民藝協会会長）および萩原の座談が行われ、フロアからも活発に質問が出された。この記録は別途、南砺市のほうで記録にまとめる準備が進められているところである。

